

天声人語

秋たけなわ、サケが海から故郷の川へ戻る時分である。遡上や産卵が間近で観察できると勧められ、北海道は知床に近い標津サーモン科学館を訪ねた。1

991年秋に開館し、今年は25周年にあたる▼市村政樹館長(49)は「今年夏に台風が三つも四つも襲来して大変でした」と話す。標津川の河口に流木が寄せ、館内の水槽へシロサケを導く魚道が不通になった。復旧に半月、恒例の秋まつりに辛うじて間に合った▼多少の増水ならサケには遡上がしやすくて益もある。それでも今年のような台風の連打はさすがに有害だという。せつかく産んだ卵を流されてしまう▼はるかアリューシャンやベーリングの海から帰ったサケの産卵は、さながら戦場である。メスは川底の適地をほかのメスと奪い合う。尾びれで砂利を掘り産卵床をしつらえる。オスはと言うと、メスに身を寄せ体を震わせる。さして役に立っているようには見えないが、メスを励ます重要な動きだそうだ▼日本大学の牧口祐也助教(54)は標津でサケの心拍を調べた。産卵と放精に要する6〜7秒の間、オスメスとも心停止することが確認された。その仕組みにはなお謎が多いが、話を聞いて次世代への命のリレーの大変さを実感する。どの生物にとってもまさに命を燃やす大事業である▼産卵を終えて浅瀬に流れつく今際の鮭の水を打つ音、磯和子。産卵放精を終えたサケの命は短い。1カ月と持たない。再び大海をめざすこともなく、静かにとこしえの眠りにつく。